

# 天狗大会とは

## 1 「発端」

運と実力の境界が曖昧な世界で勝負に賭ける「ジャンキチ」ほどではないにしても、技と力がすべてのはずの卓球スポーツでも、負けず嫌いの「ピンキチ」たちの「自分が勝ったのは実力のせい、負けたのはツキのなさ」式の一人よがりな相当なもので、その強がりな自恃心には時に手に負えないほどのものがある。力が拮抗している者同士の間では、潔く相手の勝ちを認めたとしても、自分の非力を認めることはめったにない。こんな傾向は、シニア、ベテランの間でとくに顕著のようだ。

1974（S. 49）年2月下旬の「養生院杯」争奪大会（後の小金井市オープン選手権大会）のシニア部門で、日ごろ腕自慢のある男が「格下」の仲間にあたまたま当たって、あえなく負けた。大会あとの、反省会という名の仲間の‘イッパイ’の会で、意気揚々の面持ちでひときわ舌も滑らかな「格下」に対して、くだんの腕自慢が、まずは潔く賛辞を送ったまではよかったが、続いてその弁は自身の偶々の体調不良や、いつときの多忙による練習不足の言い訳に移り、杯が進むほどに「今度はそうはいかんぞ！」の強がりから、「お前を負かしたあのヨソ者に、オレはいままで負けたことがない」云々と、反省の弁はいつしか例の自慢話に変わっていった。自慢話は伝染し、忽ちそこらじゅうが腕自慢だらけになってしまう。おっとりと構えつつ、これも腕自慢では人後に落ちぬ別の男が、慚然として曰く、「みんな天狗ばかりだなあ。みんなの話を聞いていると、誰が本当に強いかわからなくなる。どうかね、折々に仲間うちでリーグ戦をやって、その時々が一番を決め、それ以下の序列も決めるというのは？」異存なし！口々に「おう、そうしよう！」—こうして始まったのが、すなわち「天狗大会」。

この「おう、そうしよう！」の背景には、週一回の学校開放ごとに卓連の大多数メンバーが一堂に集う今と違って、当時は主な「天狗」たちが卓連のほかに、それぞれ自分の企業クラブや他クラブに二重所属し、そちらでもいろいろ行事があって、お互い一堂に会する機会が、したがって互いに矛を交える機会が、今に比べてずっと少なかったという事情もある。

天狗大会には、大天狗、小天狗たちの際限のない鼻高自慢に折々カタをつけるという目的のほかに、連盟内の融和・懇親を深めるという殊勝な趣旨も含まれる。だから、身内の天狗同士の「対外試合よりきつい」バトルのあとには、そのきつさを癒すための和やかな懇親会が必ずセットされる。

## 2 「経過」

1974（S.49）年5月、第1回がスタート。その第1回大会は、卓連の登録人数そのものが少なかったから参加者はさらに少なく、8人総当り1ブロックのみの、大会ならぬ“小会”だった。同年秋の第2回からは参加者が少し増えて、A、Bの2ブロック制となる。初回からの参加者で今も天狗名簿に名を残すのは、山宮（信）、石田、芳賀、天野、森、西島、喜田など。

当時の卓連には佐藤明善という、秋田の卓球名門校出身の“別格”がいた。都内某信託銀行の卓球クラブにも所属するペン表ソフトの速攻型で、まだ20歳代後半、関東所在銀行間の大会では個人戦10連覇を果たした猛者だ。むろん都下でもトップクラスで、さすがに卓連内の“口猛者”たちも彼に口舌を挑む者はいなかった。腕でも口でも、競うのはその“別格”を除いた面々の間でのことだった。

1976（S.51）年、佐藤が転勤で小金井を去り、佐藤“大天狗”時代が終わりを告げる。入れ替わるように卓連に登場したのが、当時すでに小金井に在住して、都内強豪連の溜まる名門、杉並の「南阿佐ヶ谷クラブ」で活躍していた安東和義。安東の卓連登場や一時の東久留米市転住などの経緯は、卓連創立50周年記念誌「KTTC2001」の安東自筆にもあるので省略するが、当時の彼はペン表ソフトでとりわけカットマンに強く、佐藤以後、天狗大会は1985（S.60）年まで「安東時代」が続く。

大会開催は春秋2回。当初、春は連休中だったり連休明け第2、第3日曜日だったりともまちまちだったが、秋は11月3日の祭日に固定されていた。やがて春も連休明け最初の日曜日に固定されるが、今度は秋のほうが会場の都合で1997（H.9）年秋からまちまちとなり、12月にずれ込んだ年も2回ある。

1980（S.55）年頃から大会参加者が急増し、それに伴い1ブロック6人編成のブロック数が増えて、やがては1部から9部までを数えるようになる。新入り強豪が9部から1部に到達するには、各部でトップを続けても4年余を要することになった。そのため「付出し」制度を設けたり、3部以下をピラミッド型の複数ブロックにするなどして、新入り強豪連の早期上部入りを可能にしたが、複数ブロックでの昇格・降格者決定戦が煩雑で時間を要するため、現在は3部以下をすべてA・B2組の複線方式とする。入替え戦はかつて各部間にあったが、今は1、2部間のみ、2部以下は最下位者（棄権者を含む）が例外なく降格する。

毎回、各部で歓喜・苦渋のドラマが展開され、さまざまな記録と記憶が刻まれるが、以下、頂点グループの動向のみ略記すると・・・

1984 (S. 59) 年にバリー・ヘイターが1部入り。1986 (S. 61) 年春にはトップに立って遂に「安東時代」に幕を引き、「バリー時代」を引き寄せる。因みに、バリーが1部入りした年、大会幹事となった彼の発議で各部の1位者に天狗面が、とくに1部1位者には大天狗面が、それぞれ持ち回りで授与されることになった。が、当人(ともう1人の幹事)がわざわざ高尾まで足を運んで仕入れた10個ほどの天狗面は、素焼きで壊れやすく、持ち回りの間に鼻が欠けたり額が剥げたりして、もらった者の間に「ありがた迷惑」の声が高まり、2年を経ずして放置・所在不明の成り行きとなる。

### 3 「経過」

「バリー時代」が3年目を迎えた1988 (S. 63) 年春、旺文社(当時)でまだ現役の桜井茂雄が1部入りしてあっさり全勝し、これで「バリー時代」は命短く終焉、当分は磐石の「桜井時代」か、の感を人々に抱かせる。が、桜井は以降1991 (H. 3) 年秋までの3年間6回、「大天狗」の座を制するのだが、1992 (H. 4) 年春から何度か棄権が続いて降部を重ね、1994 (H. 6) 年春に1部復帰して再び「大天狗」の座に着くまでの2年間、「バリー時代」が再現する。

桜井が最初に棄権した1992年春、その前年に1部入りした若い上森正利が「鬼の居ぬ間」を駆け登って優勝、しかしこれは1度きりの線香花火で、「いよいよオレの時代！」を真に受ける者は誰もいなかったが、今にして思えば、その線香花火はやがて訪れる「上森時代」の予兆ではあった。この間、1990 (H. 2) 年春に2部でシェーク転向第1戦を戦い4位だった安東が、1992 (H. 4) 年秋には念願の1部復帰を果たして再び頂点争いの戦列に加わる。

1994 (H. 6) 年春から翌年春までの3回、再び桜井が頂点に君臨。1995年秋から桜井の2度目の欠場期が始まると、その後2年間は、シェーク転向7年目の安東が1995 (H. 7) 年秋～1996年春、バリーが1996年秋～1997年春を制覇して、やや「昔の名前」の“2頭期”を過ごすこととなる。

この間、大会会場は手狭の緑小体育館から三小体育館に移転。

1997 (H. 9) 年秋に上森が全勝1位となって、いよいよ本物の「上森時代」に入る。以降、2000 (H. 12) 年秋まで7回トップを続け、2001 (H. 13) 年春に再度復帰の桜井に1敗して2位となるが、翌年春にはその桜井を降して、「やっぱ、ボクが一番でしょ」に誰も文句を言わなくなる。2002 (H. 14) 年秋を欠場して3度の1部不在期を作り、その間に安東、

小林賢二、木村保幸が“2鬼”の居ぬ間の戦国時代を制す。上森は2004年春も、久々の1部復帰戦で小宮誠司の後塵を拝することとなるが、2004年秋の現在、「上森時代」は危ういながらもなお続いていると見てよさそうだ。

広辞苑によれば、その字義は「高慢なこと、自負すること、またその人」と、いかにも素っ気ないが、ここで「大天狗の座に着く」と言う場合の「天狗」は、力ある者に対する尊称、畏称。「みんな天狗ぞろいだね」と言う場合の「天狗」は、負けん気が強くてちょっぴり滑稽な自慢屋さん、というほどの意味。「あいつは近ごろ天狗になっている」という場合の「天狗」とはだいぶニュアンスが違い、鼻持ちならぬほどではなくて、手に負えぬところもあるがどこかユーモラスで愛すべき風情がある。天狗大会は、そんな天狗たちの背くらべ大会・・・。

負けん気、自負心、他人の目に映るよりはるかに高く輝かしい自己イメージ・・・いいではないか。それが日常の蹉跌を超える気概を生み、あしたに向かう自分を支え、絶えざる向上心のモメンタムになるのなら。

こうして人々は自分の人生の主人公として、今日も変わらず健気にせつせと自分史を刻む。

天狗、バンザイ！

2004.10.7 森 記